

京都大学映画メディア合同研究室主催第1回シンポジウム
「ポスト・シネマの映像——ゆるる身体とメディアの今——」

発表者1

鄭知硯（東北大学大学院）

タイトル

震災ドキュメンタリー映画におけるジェンダー表象
——映画『防災やりたい！彼女たち』（2015）を視座として——

発表要旨

21世紀のメディア環境の中で発生した2011年の東日本大震災は「現代日本で起こった、史上最も徹底的に映像記録され、その視覚イメージが共有された災害」（丹羽、2017）と言われ、テレビニュース報道などマスメディアでの記録活動に加え、一般市民自身が被災経験や被災地をデジタルカメラやデジタルビデオカメラ等で記録した「ポスト・シネマ」としての「ドキュメンタリー」（渡邊、2016）をはじめとした震災に関する膨大な映像群が存在しており、これらの震災映像をいかに解釈するのかという課題が注目されている。

その中から今回の発表では2015年に公開された若い女性たちによって創立・結成された団体「防災ガール」をテーマとしたインディペンデント・ドキュメンタリー映画『防災やりたい！彼女たち』（2015年）⁽¹⁾を取り上げる。

本発表では、映画『防災やりたい！彼女たち』において描かれた女性の身体表象や、ジェンダー規範、固定的な視覚イメージを制作する手段や防災分野に参加する女性を巡る言説などを分析・考察することで、映画に反映された3.11以降のドキュメンタリーのメディアとしての特性、および社会における不均衡なジェンダー関係性と繋がる固定的なジェンダー観念を明らかにする。

具体的に、本発表では以下の三点をめぐって考察を行う。

第一に、防災業界へ進出するための一種のマーケティング戦略として、防災ガールのメンバーたちが、防災情報を「オシャレでポップな」方針によって発信する取り組みを実行した女性表象が、いかに映像で描かれているのかという点。

第二として、＜若い女性＞がこのような発信方針で防災に関わることを批判・拒否する言説も防災ガールに寄せられたことに＜対抗＞する女性たちが、映画ではどのように捉えられたのかという点。

第三に、映画において批判の言説に対抗している防災ガールの姿が描かれた一方、＜かわいい＞を演出する女性の表象や、防災ガールのPV動画における女性の身体表現に対する考察を通じて、彼女たちが実践している発信方針に暗黙に内面化された「規範（Norms）」と

「視線 (Gaze)」も読み取れるという点。

以上の三点を踏まえ、本発表では、東日本大震災以降のドキュメンタリーで女性のジェンダー表象がいかに構築されたのかについて考察し、さらにこのメディア表象ではどのような可視的、不可視的な社会的・文化的差別を反映しているのかという問題を考察することを目指す。

[注]

(1) 作品分析にあたっては YIDFF 「311 ドキュメンタリーフィルム・アーカイブ」にも収録されている DVD ディスクを使用した。YIDFF は東日本大震災の記録映画とその作品資料を蒐集・保存し、作品情報を世界に発信することを目的とする映像アーカイブである。『防災やりたい!彼女たち』、監督：岡崎孝、2015 年。

[書誌情報]

丹羽朋子「3.11 以後の映像記録の語りなおし：記録・展示・アーカイブ化の連環の先へ」『日本文化人類学会研究大会発表要旨集』、2017 年、A26 頁
渡邊大輔「ポスト・シネマ・クリティーク (第 3 回) イメージの過剰流動化と公共性のはざままで：想田和弘監督『牡蠣工場』による ライフ ログ」『ゲンロン』3.5 号、2016 年、69-75 頁